



おもしろい～♪ 森

令和元年度 つるおか森の保育活動記録

はじめに

つるおか森の保育研究会は平成 22 年の発足から、令和元年で 10 周年を迎えました。

市の面積が東北で一番広い鶴岡は、7 割が森林で、他にも里・山・海など豊富な自然に恵まれています。

この自然を活かして、子どもたちの豊かな育ちを養うことを目的として当研究会が発足し、フォーラムを開催し、活動の内容を発表してきました。

私も発足当初から副会長として一緒に活動してきましたが、令和元年度からは会長を務めることとなりました。これまで発足からずっと会長を務めてくださった神田リエ先生、アドバイザーとして見守ってくださった平智先生、そして各保育園の先生方のご尽力があり、10 周年を迎えることが出来ましたことを心から感謝申し上げます。

10 周年を記念し、4 月には東京大学名誉教授の汐見俊幸氏と大妻女子大学講師の小西貴士氏をお招きし、『これから必要とされる教育・保育とは』という内容で記念講演会を開催し、自然の中で育つことと、持続可能な社会を作る事の大切さについて学びました。

また、5 月と 10 月には、汐見氏が村長を務め、小西氏の活動フィールドである山梨県のハヶ岳にある『ぐうたら村』に 1 泊 2 日の研修を行いました。

そして、2 月には玉川大学教授の大豆生田啓友氏と小西氏をお招きし、10 周年記念フォーラムを開催いたしました。「鶴岡の自然を活かした保育で何が育っているか」という内容の発表討論会においては、朝日保育園の田中梓先生と松原保育園の菅原梢先生が事例を提供して下さいました。

この事例に対しまして大豆生田氏から「自然資源に関わる遊びで大切なことは、単に自然に触れさせ、制作をさせればいいのではなく、子どもが何かに気づき、発見し、親しみ、問いを持ち、探究し、命への驚きがあるなど、夢中になって没頭していく姿にあるのだと思う。そのための保育者の関りで大切な事がこのふたつの事例にはたくさんあったと思う。」というお褒めのコメントをいただきました。また、フォーラムの会場には当研究会メンバーの保育園の活動がパネルにて紹介されました。

最後になりましたが、本研究会の活動を支え、ご指導・ご協力頂きました多くの皆様に心からお礼申し上げます。

令和 3 年 1 月
つるおか森の保育研究会
会長 本間 日出子

1	森の保育園体験（交流保育）	1
	いずみ保育園×かたばみ保育園 黄金保育園×民田保育園	
2	森の保育園体験（自主保育）	5
	東部保育園、松原保育園、上郷保育園、大東保育園、福栄保育園、 小堅保育園、田川保育園、三瀬保育園、明日のたね	
3	森の自然体験	21
	中央児童館、子ども家庭支援センター	
4	つるおか森の保育研究会発足 10 周年記念事業	25
	(1) 講演会 (2) 保育と自然資源を考え直す体験研修会	
5	つるおか森の保育フォーラム	28
6	研修会	29
	森の幼稚園勉強会	
資料		
	つるおか森の保育研究会の概要	30



“森”の文字を3本の木で描き、それぞれの木の色は、新緑から紅葉へと移っていく森の様子を表しています。

この木が何の木なのか…、みなさんでイメージを

膨らませてみてください。

森の活動では、五感をふんだんに使って、

いろいろなイメージを膨らませることができます。

交流保育

つるおか森の保育研究会では、主に市街地の保育園の子どもたちに自然とふれあう機会を与えることを目的に、海や山など周辺の自然環境に恵まれた保育園との交流保育を行っています。

(受入園) いずみ保育園 × (訪問園) かたばみ保育園

いずみ保育園 5歳児

【令和元年10月30日(水) 秋の森であそぼう (いずみ保育園周辺のカマキリ公園と川代山地区)】

<活動内容>

- ・散策、木の実拾い、くず引っ張り

活動のねらい

- ・秋の自然に触れながら長い距離を歩いたり、くず引っ張り遊びを楽しむ。
- ・他園との交流を通して、発見や驚きを伝え合い、興味・関心を深める。

活用した自然資源

どんぐり・まつぼっくり・くずのツル
田んぼ・堰・畦道・ナンテン
ウメモドキ・ノブドウ・クルミ

- ・林に着くと、どんぐり・栗・くるみ等の木の実に興味を持ち、それぞれ拾う姿が見られたが、林の中に畦道や、ちょうどジャンプできる高さの所があったため、ジャンプしたり、渡ったりなどの遊びが始まる。
- ・K君が小さな堰にいもりを発見したことをきっかけに、その中に入って遊び始める子が増える。
- ・昨日まで雨が降っていたので土が濡れていたが、汚れを気にせず、その感触を楽しむ姿も見られた。
- ・初めはそれぞれの園の友だちと遊ぶ姿が見られていたが、堰に入ったのをきっかけに自然と交流し遊ぶ姿が増えた。
- ・かまきり公園では、フェンスにからまったくずのツルがあることを知らせた。それぞれ引っ張って遊んでいたが、友だちを呼び、みんなでつながって引っ張ったり、長いツルで綱引きごっこが始まったり、縄跳びをしたりなどの遊びに発展していった。くずのツルでリースも作れることを紹介し、後日、リース作りをそれぞれの園で行うことができた。拾った木の実などで1人ひとり、デコレーションし完成することができた。



- 木の実などの自然物を拾ったりすることも活動の中に取り入れていたが、雨あがりという天気もあり、自然の中で体を動かすなど、自然の中で子ども達が自分たちで遊びを発見し、広がっていったように思う。
- かまきり公園でのくず引っ張りは、帰り道に少し立ち寄ったため、時間を十分に取れなかったことが反省点であるが、ツルを使った遊びを園にも持ち帰り楽しめるようにしたことは良かった。

かたばみ保育園 5歳児

【令和元年10月30日（水） 秋の森であそぼう！（いずみ保育園周辺のカマキリ公園と川代山地区）】

<活動内容>

- 川代山地区に散歩に出かけ、木の実集めや、堰や田んぼでの遊びを楽しむ。
- カマキリ公園でくずのツル引っ張りをする。

活動のねらい

- 秋の自然に触れながら長い距離を歩いたり、くずのツル引っ張りを楽しんだりする。
- 他園との交流を通して、発見や驚きを伝え合い興味・関心を深めていく。

活用した自然資源

どんぐり・まつぼっくり・くずのツル
田んぼ・堰・畦道・ナンテン

- いずみ保育園の5歳児と一緒に散歩に出かけ、一面に田んぼが広がる環境の中で、どんぐりなどの自然物を見つけたり、細い畦道を一列になって歩いたり、段差のある畦道で飛び越えたりする遊びを楽しみました。
- いずみ保育園の子が畦道の高い所からジャンプして堰を飛び越えている姿を見て、おもしろそうと感じた子どもたち。一人が真似をすると次々とチャレンジしました。
- 自分達が普段遊んでいる環境とは違う自然環境の中でのおもしろさを発見し、やってみようと思欲的に遊んでいました。
- 帰り道の途中で寄ったカマキリ公園では、くずのツルで綱引きごっこをしました。フェンスに絡まって、引張ってもなかなか取れないツル。一人では難しいとなると友達と協力して引っ張り始めました。いずみ保育園の子も自然と手伝ってくれました。



- ツルを引っ張るといった目的を達成するために自然と集まり、力を合わせている姿から、1つのことをやり遂げるために、友達と協力して取り組む力の育ちを感じました。



- 普段から身近な公園や自然環境の中での楽しさを見つけ、遊べる子ども達ではあるが、初めての場所でもその場の環境の楽しさを発見して楽しめる力を感じました。
- その力を十分に発揮できるように、普段遊んでいる環境の中で更に工夫することで、新たに楽しめる遊びを子どもと一緒に見出していきたいと思いました。

(受入園) 黄金保育園

×

(訪問園) 民田保育園

黄金保育園 5 歳児

【令和元年7月22日(月) 川遊びを楽しもう in 安国神社 (金峯山旧道登り口)】

<活動内容>

- 川遊びを楽しむ。

活用した自然資源

山の川水、川の中にいる生き物

活動のねらい

- 黄金地区の金峯山のふもとにある安国神社での川遊びを通して、身近な初夏の自然に触れる。
- 民田保育園と黄金保育園の友だち同士の交流を楽しむ。

- 身近な里山にある川で、同じ黄金地区である年長同士の交流の中で、自園の友だち同士だけでなく、一緒になって川に入り、お互いに水中眼鏡を貸し借りしながら、川の中にいる生き物を探して楽しむ姿があった。
- サンショウウオやヤゴ、沢蟹を見つけて、タライに入れると、自然とその周りに集まって、観察ケースや拡大鏡の中に入れてじっくりと観察したり、手の平に乗せて「かわいい見て～」と見せ合ったりする姿もあった。



- 「サンショウウオの指、5本ある!」「目もある!」と気づく子もいた。
- 生き物探しだけでなく、滝の水に打たれて水しぶきに歓声を上げて全身で初夏の川水の心地よさを味わうことができた。
- 「この川どこまで続いているのかな?」と、川をさかのぼって歩いて探検する子ども達の姿もあり、川遊びを通して、「川」についての興味関心を持つきっかけにもなった。



-
- 自園の子ども達だけでなく、同じ地域の友だちと一緒に身近な自然の遊び場を知り、五感を使って自然の中で遊ぶ楽しさも味わうことができたことは、良い機会となったと感じる。
 - 身近な里山の自然において、同じ小学校に入学する子ども同士、川遊びを楽しんだことで、お互いに親しみをもつきっかけとなった。就学後も、「一緒に遊んだよね」等と共感し合う機会になるのではないかと期待している。
 - 活動の合間に、おやつ Time を設けたことで、友だちと一緒にホッと一息をついて、野外でおやつを食べる美味しさや楽しさを味わうことができたことも良かった。





- ・「花は匂いがするもの」という考えを持っていたKくんだからこそ、匂いがしなかったことに驚きと疑問が生まれ、花以外の物の匂いを確かめたくなったのだと考えた。
- ・これまで普段の遊びの中では意識が向かなかったことも、フィールドビンゴのように、意識を向けるきっかけがあることで、新しい発見をすることができ、子ども達の興味の世界も広がっていくのではないかと感じた。
- ・今回は季節の変化を一番感じやすいと思い、秋に活動を取り入れてみたが、春から季節ごと取り入れてみることで、子ども達ならではの気づきが見られ、より自然でのあそびに興味を持っていくのではないかと感じた。

松原保育園 3・4・5 歳児 異年齢保育

【令和元年 10月21日（月） 妖精の洋服づくり ～オータムコレクション2019～

（赤川フィールド）】

<活動内容>

- ・秋の草花を見つけ、段ボールに描かれてある妖精に自然物で飾りつけをする。

活動のねらい

- ・身近な自然環境である赤川をフィールドに、自然体験を経験する。
- ・季節の移り変わりを感じ、気づきや感じる力を育む。

活用した自然資源

ススキ・クルミ・あけび・ブタクサ
ナナカマド・ノブドウ 他

- ・春、夏に赤川で散策経験をしてきたことで、秋にはこれまでに見られなかったクルミやススキなどの植物や、色づいた木の実を発見することができた。
- ・洋服づくりというテーマがあったので、どんなものを飾りたいかイメージしながら草花を集めていた。
- ・3歳児は、洋服を作るためというよりは、自分の目に入った欲しいものを集めていたが、4・5歳児が散策しながら、「ススキ、髪の毛にしたらいいんじゃない?」「この実、可愛いからボタンにしよう」などと言っているのを見て、少しずつ散策の目的がわかったようである。
- ・グループでの活動だったので、自分が見つけた植物を飾り付けて洋服が変化する面白さだけでなく、いろんな子がいろんな植物を足して変化していく楽しさを感じたように思う。





- 保育園に戻ってから、赤川で作った段ボールに描かれている妖精の顔をくりぬき、顔出しパネルにして遊んだ。玄関に活動の様子を撮った写真と一緒にパネルを飾ったことで、保護者にも活動の様子を知らせることができた。
- 赤川の大自然の中に段ボールを用意したことで、散策した後すぐに飾り付けが出来たので、保育園に持ち帰ってするよりも子どもたちの意欲が高いまま活動することができ、楽しさに繋がった。
- 年齢で活動内容を分けるのではなく、異年齢で同じ活動にしたことで、教えあったり、協力したりしながら一つの作品を作る楽しさを感じることができた。

上郷保育園 3・4・5 歳児

【通年 季節の草花あそび・生き物探し（保育園周辺・農村公園・せせらぎ公園）】

<活動内容>

- 季節の草花に触れ、虫捕まえなどをして自然にじっくり親しむ。

活動のねらい

- 季節の移り変わりを感しながら存分に遊ぶ。

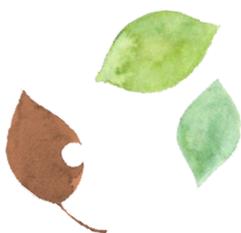
活用した自然資源
草花、虫

- 農村公園の草が刈られていて友だちと一緒に草を集め「ふかふかのベットだよ」と草の上に転がって見たり、「バーベキューしよ」と山のように草を集め、その中に松ぼっくりを入れて焼く真似をしたりして、子ども同士でアイデアを出し合い遊びが広がっていました。

- 春の花をたくさん摘み、図鑑で調べて、ハルジオンや藤の花という名前だとわかりました。年長児がヒメオドリコソウを覚えていて、それが年中や年少の子にも広がり、親子遠足で緑地公園に行った時、家の人に花の名前を教えていて、驚かせていたこともありました。
- 春に近くのせせらぎ公園に歩いていき、お花見をしました。道中、つくしやチューリップ等春の花を見つけていきました。
- 公園に着くと「桜のトンネルだ！」とうれしそうに上を見ながら歩きました。



- 秋にもミニ遠足でせせらぎ公園に行きました。道中、黄色のセイタカアワダチソウがあり、「あー！去年も見た！」「なんとかアワダチソウ？」「あ、セイタカアワダチソウだ！」と去年の事を覚えていて、嬉しそうにしている姿が見られました。実がなっていると「この実なんだ？」「ブルーベリーじゃない？」という会話や畑に里芋がなっていると、「保育園にもあるよね」と子ども同士で会話をしていました。
- せせらぎ公園では5～6人の小グループに分かれて色々な葉っぱを見つけました。「穴あいてるのあったよ！」と一人の子が言うと「なんで穴あいてるんだろう？」「虫が食べたんだよ」という場面があったり、様々な色の葉っぱを見つけると、「ここは赤でしょ。これは緑で・・・」と葉っぱを隅々まで探してみたり、友達の葉っぱには何色があるかのぞき込んだりしていました。



- 身近な自然の中でのびのびと遊ぶことができました。興味の持ったものを図鑑で調べたり、友達同士で不思議に思ったことを話し、教え合ったりする姿もあり、関心が広がったと思います。
- これからも子どもの関心やつぶやきを見逃さず、一緒に楽しんでいきたいです。

＜活動内容＞

- ・準備運動もかねて、草花などで自然の色探しをする。
- ・森の散策をしながら、葉や木の実に触れたり、虫を見つけたりする。

活動のねらい

- ・草花等で赤や黄色の様々な色探しをする。
- ・森の自然に触れ興味関心を深める。



- ・準備運動もかねて色探しゲームをしました。水色と難しいものもありましたが、草原を走り回って「〇〇色あった！」「次は〇〇色！」と張り切ってたくさんの色を見つけました。
- ・森の散策では「サクランボあった！」と小さな赤い実を見つけ嬉しそうにお散歩バッグに入れたり、小さな虫を発見し少し怖がりながらも手で触ってみようとしたりする子もいました。
- ・野苺を見つけ実際に手にとって触れ「これなんだろう？」とまじまじと見る姿がありました。タヌキの糞を見つけ「タヌキの糞だよ」とタヌキの家族は同じ所で排泄をすることを教えてもらったり「えー！タヌキのトイレ?!」と驚いたり、面白がりながらじっくり観察をしていました。
- ・専門員さんもあまり見たことのない大きい黄緑色のカエルを見つけ「何?!」と驚きながらも友達と一緒にじーっと不思議そうに見ていました。



- ・ハチは出ませんでしたでしたが、園でハチが出た時に教わったことを思い出して静かに身をかがめている姿がありました。
- ・以上児のクラスでケヤキの森の散策に行きました。初めは専門員さんから、熊やハチ等に遭遇した時の対処法をわかりやすく教えてもらいました。
- ・普段あまり触れることのない森の中で、木の実や虫などを発見して驚いたり、嬉しがったりする姿が見られ、ゆっくり自然の中で遊ぶことができました。
- ・専門員さんを先頭に保育者は子どもの間に入って散策をしましたが、ただ競争のように早足で進む子もいたので、前の子たちが観察していたものを後ろの子どももじっくり見られるように間に入った保育者が関わっていくようにしたいです。



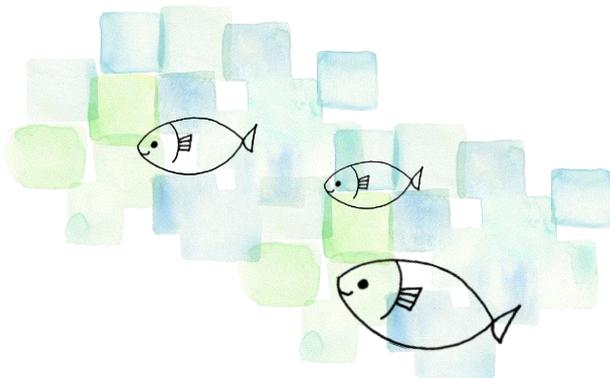
＜活動内容＞

- ・川遊びをして水の冷たさや川の流れるを感じる。

活動のねらい

- ・夏の自然に触れて遊ぶ。

- ・4・5歳児のクラスで近くのせせらぎ公園に行き、川遊びを楽しみました。
- ・川の中に入ると「はっこーい！！」と言いながら嬉しそうに歩いたり、石の上を渡ろうとしたりしていました。
- ・川底の石に興味を持ち、面白い模様の石を見つけたり、数字が書いてある石に「〇番見つけたよ！」と喜んだりする姿がありました。
- ・底が見えるバケツで水の中をじっくりのぞいてみたり、人がいない端っこのほうに生き物がいることを知っていて「誰もいない方を探してみよう」と友達を誘って音を立てないように静かに動きながら網ですくおうとしたりする子がいました。
- ・大きい石もあり、石に水を流しながら「ウォーターライダーみたい！」と滑って楽しみました。年長の子が「次の人どうぞ」と小さい子のことも見ながら遊んでいました。
- ・場所によって水位が違い「ここ（ひざ）まで水があって深かった」「ここは流れが速かった！」と色々なことに気づきながら遊べました。
- ・プール遊びとは違う水遊びで、場所によって川の流れの速さの違いや、石にも様々な形や色、模様があることに気づき、発見しながら夢中になって遊ぶことができていました。



- ・初めての川遊びで、遊び慣れるまで少し時間がかかりました。
- ・休憩後の遊ぶ時間が短かったので、時間配分を考えながら休憩をとるようにしたいです。

大東保育園 4・5 歳児

【通年 季節の山菜を探そう（保育園周辺の森）】

＜活動内容＞

- ・ 季節の山菜を採り、自分たちで下処理したものを調理して食べる。

活動のねらい

- ・ 森の中の植物に興味をもち、五感を使って楽しむ。

- ・ 園の周辺には森がある。季節や時期、場所によって育つ植物にも変化があり、中には食べられる山菜も多く群生している。そこで、子どもたちと一緒に山菜採りを行った。
- ・ 保育者が山菜を見つけ、「食べられるんだよ」と知らせると興味をもち始め、袋いっぱい集める子どもたち。
- ・ 子どもたち自らも「これ、食べられるんじゃない？」「保育園で凶鑑見よう」と話をする場面もあった。
- ・ 回数を重ねると、「また大きくなるように」と根っこが残るように力加減や取り方を工夫する姿もあった。
- ・ 園に戻り、子どもたちと一緒に下処理をした。山菜によって違う処理の仕方を知ることができた。
- ・ 山菜取りや下処理を通して、ふきのとうの独特の香りを嗅いだり、ワラビのぬるぬる感を感じたり、ミズの筋取りで指先につく水分の水々しさを感じていた。
- ・ 調理してもらったものを給食やおやつ時間に食べた。調理前とは違う色の変化や山菜の味、咀嚼の音などの気付きを子どもたち同士で話し、森の恵みを感じながら食べていた。

活用した自然資源

ふきのとう・ミズ・フキ
つくし・ワラビ



- ・ 今年5種類の山菜を採り、味わった。“収穫・下処理・食べる”の工程を五感を使って経験することで、その変化を子ども達自身が予測したり、気付いたりする機会になった。
- ・ また、この活動をおたよりなどで家庭に発信することによって、散歩で持ち帰った山菜が家庭でも食卓に並んだという話をたくさん聞くことができた。

福栄保育園 1歳児～5歳児 異年齢保育

【通年 令和元年5月23日（木） 裏山の春探し（福栄保育園周辺の山道、あぜ道）】

<活動内容>

- ・山道、あぜ道散策をしながら春探しを楽しむ。

活用した自然資源

葛の葉・どんごい・よもぎ

活動のねらい

- ・春探しをしながら草花の様子などの気づきや思いを伝え合う機会をもつ。

- ・天気が良く、散歩に行きたいと言うので、いつもの様に「田んぼのほうがいい？山がいい？」と聞くと、「山がいい」と言うことで、裏山散歩を選択する。
- ・葉を採って匂いをかいだり、ルーペで葉脈などを見たり、いろんな草花に目を向けながらもひととき目立って成長する植物が目に行く。
- ・くずとどんごい、よもぎの葉があった。この名前は覚えていて、指さしながら子どもたちから発見の声が聞かれる。
- ・「よもぎでホットケーキ作ったよね」「どんごいでツリー作ったよね」「どんごいの葉っぱで染め物もしたよね」と昨年の活動を振り返っていた。
- ・「くずの葉っぱでも染まるのかなあ？」とA君。「どうだろう？」「できるんじゃない？」などと意見がとびかい、去年はどんごいで染め物をしたが、今回はくずの葉染めに挑戦することとなった。
- ・染め物に使う葉っぱは、どの葉っぱが良いか選択する目が輝く。B君が「柔らかい葉っぱの方が黄緑色でおいしそう」と言うと、周りの子どもたちは笑いながらも「そうだね。染めるのもおいしいほうがいいかも！」と盛り上がる。
- ・「虫食いの葉っぱはダメだよ」とC君。「どうして？」と保育者が尋ねると「きっとおいしい葉っぱだったから虫が先に食べたんだよ。もうおいしくなくなっているから…」うんうんなるほど～と、その言葉に周りの子どもたちも納得しながら草摘みを楽しんでいた。
- ・未満児の子どもたちに「この葉っぱがいいよ」などと声をかけてくれ、一緒に活動してくれるA子ちゃん。異年齢で関わり合い、笑顔でくずの葉っぱを袋に詰め込んでいた。





- 子どもたちのちょっとした気づきに、友達や保育者が共感したり、一緒に考えていくことで面白い発想が生まれたり、自分の思いを伝える嬉しさなどにつながると感じた。
- 自然散策を通しながら「硬さ」「大きさ」「数」などの違いについて学ぶことにもつながっていた。
- ちょっとしたきっかけづくりや共感してあげるタイミングは難しいが、大切にしながら関わっていきたいと思った。
- 子どもたちの「もっと知りたい」「考えたい」の時間を作る余裕を持つことができていないことに課題があると反省した。

小堅保育園 3・4・5 歳児 異年齢保育

【令和元年7月下旬～ ヤギと暮らす…いつも一緒に（小堅保育園 園庭 ももちゃんハウス 園周辺の砂浜 里山）】

<活動内容>

- ヤギの世話・ヤギの家作り・ヤギとのふれあいをする。

活用した自然資源
海（砂浜）・山（木・葉っぱ）

活動のねらい

- ヤギとのふれあいを通して、生活の中で「命」を考える。

- 0・1 歳児や生き物が苦手な子は、最初は元気に飛び跳ねるヤギに圧倒され怖がるが、興味津々な様子はある。



- ヤギに押されて泣く→それでも近づく→近くに行くと笑う→室内から「もも〜！」と呼ぶと「ベェ〜！」と返答してくれるようになると、嬉しそうに室内外どこにいても「もも〜」と姿を追い、声を掛ける姿がある。
- ヤギが来るまでの準備。ももちゃんのご飯の箱作りや、名前を考える、保護者と一緒にヤギ小屋作り・堆肥入れ作りをすることで、自分たちが面倒を見なくちゃ！という気持ち、一緒に暮らしたいという気持ちが自然に生まれてきた。
- 体調を崩したときなど、自分の身体と重ね合わせて考え、心配したり、対処しようとしたりする姿が見られるようになる。子どもたちの中に、『ももちゃんは小堅保育園の家族』という意識が生まれた。



- 生き物を飼うことは、「命」について共に生活しながら自然な形で学ぶこと。一緒に暮らす中で、子どもたちが感じたことや疑問など色々な考えや対処の仕方がある。
- 感じ方は様々だが、このことを日々の生活の中で体験できていることが、情操的な面においても子どもの育ちに大きな影響を与えていることを感じた。

- 今の子どもが持っている知恵や経験を活かし、子どもなりに考え、工夫しながら生活しており、自主的に活動したり、自分が休みの時は、自ら友達に「明日、ももちゃんお願いね」と頼み合う姿も見られるようになっている。
- ヤギがいるだけで、子どもも職員も穏やかな気持ちになる。また、地域内外の方との交流も増えている。
- 年齢に関係なく、言葉がなくても通じ合う関係性ができてきた。
- ヤギのいる保育を取り入れたことで、生命の大切さ、自然の美しさ・厳しさ・心地よさ、自然を守り、活かすことの重要性を改めて考えさせられた。今後も継続し、『命』への責任を一緒に暮らすことで、子どもたちと共に考えていきたい。

田川保育園 川遊び：全園児 お泊り保育：4・5歳児

【令和元年7月27日（土） 親子で川遊びキャンプ（八沢川・やすらぎ公園・田川保育園園庭）】

<活動内容>

親子でやすらぎ公園脇の八沢川で川遊び。

- 川周辺の生き物探し。
- 川の流れて泳いだり、チューブやゴムボートに乗ったりして遊ぶ。
- 川原に生えている植物を使った遊び。
- 川遊び後に川で冷やしたスイカ割り。

活用した自然資源
川周辺の生き物、植物

活動のねらい

- 親子や他の家族と川遊びを通して交流する。
- 保育園の周辺にある自然物（生き物、植物）に興味を持ち、色々な発想で遊ぶ。



毎年恒例の親子川遊び。

- 気温も暑すぎず、川の流れも穏やかで川遊びしやすい日でした。
- 子どもたちは、「流れに乗って泳ぎたい」「川の生き物を見つけたい」とワクワクしていました。
- 気をつけることを確認してからお家の人と川に移動しました。
- 少し深くなっていて流れのあるところで何度も泳いだり、ゴムボートに乗って流れたり、いろいろな方法で川の流れを楽しんでいました。
- 生き物を探す子は、茂みに網を入れていました。水中メガネで水の中をのぞいて探している子は夢中で潜っていました。

- 捕まえた生き物は「なんていう虫？」とお父さん博士に聞きに行きました。ペットボトルで水槽も作りました。
- 川原に生えている葉っぱを石で潰して薬屋さんごっこをする子もいました。
- 川遊びが終わってからは、みんなでスイカ割りです。水で冷やしたスイカはとってもおいしい！夜は花火もできて大満足の日でした。



- 活動を重ねるごとに、子どもたちの興味が広がっていると感じました。
- どこで探すと生き物がいるか分かるようになり、見つけた生き物の名前にも興味をもっていました。
- ここででてきた遊びを日ごろの遊びにも繋げていきたいと思いました。

三瀬保育園 0歳児

【令和元年6月末～9月 園庭遊び（園庭）】

<活動内容>

- ・園庭で泥遊びを楽しむ。

活動のねらい

- ・身近な自然と触れ合い、戸外で体を動かして遊ぶ。

活用した自然資源
水・砂・泥など



- ・4月、5月、6月は、人見知りがあり、泣いてしまう子が多かった0歳児。
- ・大人との信頼関係を築くために、0歳児の世界でゆっくりと自然の中で過ごすため、毎日お散歩に出かけ、6月末から園庭に出始めた。
- ・6月末から園庭に出た。園庭とお部屋をつなぐテラスには行くものの、ちょっと見て室内で遊んで、また園庭を見に来ては遊んでの繰り返しであった。
- ・その中で、1、2歳児が遊んだ少しの砂がテラスに残っており、手を伸ばして触っていた。
- ・園庭を“見る時間”、手の届く範囲の砂を“触る時間”が1か月ほど続いた。
- ・1か月ほど経つと、園庭に自分から降り始めた。まずは、手や足で水たまりを触ってみることから始まった。
- ・指先で触ってみたり、にぎって放してみたり、足踏みをしたりして、泥水の感触を感じていた。
- ・だんだん時間がたつと、大きいクラスの子が置いていくモノを使って遊んでいた。



- ・最初はテラスから見ることをどの子も経験しており、見ることから触ってみようということにつながって、砂・泥・水などの身近な自然素材に興味を持っていることがわかった。
- ・個々によって見る、触るまでの時間は違うため、無理に園庭に出さず、子どもたち一人一人がしたいことや気持ちをくみ取っていくことが大切であると思った。

【通年 お散歩（園前の道路）】

<活動内容>

- ・お散歩に行き身近な自然と触れ合う。

活用した自然資源

水・石

活動のねらい

- ・身近な自然と触れ合い、戸外で体を動かして遊ぶ。



- ・4月から園周辺にお散歩に出かけました。いつも側溝の水が気になる4月生まれの男の子は、側溝をのぞき、地面近くまで顔を寄せ見入っていた。
- ・じっと見た後は、「お」と指さして教えてくれた。
- ・日々お散歩に行くと、側溝から聞こえてくる音が「ジャージャー」や「チョロチョロ」と音が違っており、本児の声も大きい音の時には「お！」と元気よく、小さい音の時にはあまり声を出さなかったりしていた。
- ・秋になったころ、またお散歩に行くと、いつもの側溝へ行ったら。一度側溝を見て確かめてから、後ろの畦道に何かを探しに行った。
- ・手を見てみると、小石を持っており、側溝に戻ると、側溝の中へポトンと落とし始めた。
- ・聞こえてくる音に「おっ」と嬉しそうに反応し、また拾っては落としを繰り返していた。



- ・音に興味をもって見ており、お散歩に行くとすぐに側溝に近づいていく。男の子にとって日々のお散歩の楽しみになっていたと感じる。
- ・水の音を聞くだけでなく、「何かやってみよう」と試してみることに、豊かな感性と心が育まれていると感じた。

特定非営利活動法人 明日のたね 未就学児親子

【通年 毎週金曜日 お散歩てくてく&みんなでごはんDAY (長沼ともにひろば周辺)】

<活動内容>

- ・長沼地域(旧小学校・神社・畑)を雨の日も晴れの日も、草花や生き物を見つけ、観察しながらゆっくりとお散歩をする。
- ・旬の食材を使ったお昼ご飯をみんなで味わう。

活用した自然資源

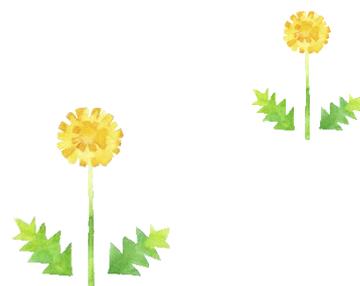
たんぽぽ・シロツメクサ
落ち葉・虫など

活動のねらい

- ・親子で散歩を通じて、季節の移り変わりや天気によって変わる風景や出会う生き物の違いを身近な自然から感じる。
- ・季節の旬の食べ物をみんなで味わう。



- ・ひろばには何度も遊びに来ている1歳の双子ちゃん。ちょっといつもとは違う様子にママから離れることができずにいた。
- ・新聞紙で作ったお散歩バッグを渡すと興味を示し、なんとか出発できそう。予定していたルートを短くし、時間も早く切り上げることも想定し出発した。
- ・旧小学校の玄関前のスロープをMちゃんが見つめ、おしりをペタンとつけて急にそこにしゃがみ込んだ。それを見ていたYちゃんも真似をした。Mちゃんは、どうやらすべり台と思ったようだ。「あれー滑らないねー」というと、立ち上がってスロープを何往復した。すれ違ったり、同じ方向に一緒に進んだり、戻ったり。新しい遊びが生まれ、ママのそばから離れて動きはじめた。
- ・「今度はこっちに行ってみようか!」と声をかけ、てくてくと草むらへ。草むらにつくと、緑のクローバーと枯草が集まっているところ、でこぼこの地面の上を縦横無尽に歩き回った。
- ・Mちゃんはたんぽぽの綿毛に向かって歩き、口をとがらせ綿毛をふうーと吹くしぐさ。なかなかできずにママの口元へ差し出して一緒にふうーと綿毛を飛ばしてにっこり。
- ・飛んだ綿毛をつかまえようと手を伸ばした。また綿毛を見つけてMちゃんは吹いては飛ばしを繰り返した。





- Yちゃんも小走りになってついて行こうとするが、ふっと立ち止まって後ろを振り返る。元の場所に戻ってまた振り返り何かを探しているよう見える。
- 何度かその行動を繰り返しているうちに、にこっと笑ってその場を行ったり来たりし始めた。
- 距離が長くなったり、まっすぐだったり、くるくる回ってみたりして枯草の上を歩いた時のシャワシャワ、カサカサする音を聞いていたようだ。
- 「音がするねー。何の音だろうね。」と声をかけ、一緒に歩いた。
- 今度はぺたんとして座って枯草をつかみ、ぎゅっと握って、ぱっと落としてを繰り返して手を使って遊び始めた。
- スタッフが上から枯草のシャワー。Yちゃんの笑い声に気づいてMちゃんも駆け寄り一緒にシャワー。顔や体を撫でてみたり、落ちていた棒で地面をつついてみたり、飽きることなく、遊ぶ。
- 帰り道では、またスロープを行ったり来たり、小さな虫をじーっと見つめて、遠くで聞こえる鳥の声に気付いてどこから聞こえてくるのか探しているようだった。
- 風で揺れている草木の音に立ち止まり、どこから音がするのか耳を澄ませている。「この音かなー？」と枝をゆすると「そう、これッ！」というように、にっこりと笑った。



- 行きと帰りでは感覚の精度が違って感じるように感じた。コースは 3 分の 1、時間は 15 分オーバー。最初の心配をよそにじっくりとお散歩した。
- 大人が先回りをして、準備をしすぎたり、しゃべりすぎたり反省することがある。とてもシンプルなことだが、フィールドで子どもに寄り添い一緒に感じることに、楽しむこと、驚くことが大事なのではないかと考える。また、全てを言葉でやりとりする必要はないと思った。
- 時間に囚われすぎず、子どもの興味のあるものやことに向き合うことが遊びとなり、疑問や気づきが出てくるのではないかと、その時の大人の声のかけ方や問いかけの仕方が重要なのではないかと考えた。そして、遊びは子どもの中にあり、正解はなく、「やりたいからやる！」子どもがやっている全てのことが遊びであり、学びとなっていると感じた。子どものありのままの姿を親と一緒に見守ること、一緒に体験すること、そして伝えることが大事だと感じた。それができてこそ、活動の継続につながり、子ども・保護者・保育者の経験値として積み重ね成長していけるのではないかと考える。
- 身近な場所でも自然を感じられ、草花や生き物に触れることができる。暮らしのそばにある自然に目を向け、気づくことから始めていきたい。
- 子どもたちの心と行動に寄り添い、じっくりと活動するためにはその必要性を理解し、活動するスタッフの人数が必要だと思った。

森の自然体験

研究会では、保育園に在籍している子どもに限らず、一般の子どもや親子を対象とした自然体験活動も推進しており、実施の支援を行っています。

中央児童館 小学生・未就園児親子

【令和元年5月11日(土) ツリークライミングに挑戦しよう！

(鶴岡市中央児童遊園内のケヤキの木)】

<活動内容>

3回に分けて、1組約75分ずつツリークライミング体験を行う。

活用した自然資源
ケヤキの木

活動のねらい

- 五感を働かせながら自然に親しみ、自然を大切にする気持ちを育む。
- 自分の力で行うことで達成感を味わい、活動を通して児童遊園の四季を感じる。



- 初めて体験する子、何回も参加したことのある子と様々あり、何人かはロープの扱い方や登る手順を覚えるのに若干時間がかかったが、コツを掴むと皆上手に登っていきることができていた。
- 時間が経つにつれて、登っていく速さが増していった。
- 普段体験できない高さからの眺めをどの子も楽しんでいる様子で、高所の枝に触れたり、登ったりすることで達成感を味わっているようだった。



- 天候に恵まれ無事開催できて良かった。
- 昨年度開催した4月とは違い、木自体に葉が茂っていて新緑を感じることができた。
- 心地良い風も吹かれる中、非常に登りやすい状況だった。
- 参加したほとんどの子たちから、また来年もしたいとの声があがった。

- ・今年度は経験者も多く大丈夫だったが、1組に低学年が多いと指導するのが大変なので、なるべく学年が分散するように組み分ける必要がある。
- ・講師の方よりドローンでの撮影をしていただき、これまで見られなかった視点からの映像も見ることができた。

【令和元年6月8日（土） ^{うまそ}美味草クッキング（鶴岡市中央児童遊園）】

＜活動内容＞

- ・児童遊園の食用になる野草を採取し、調理して参加者で会食する。

活動のねらい

- ・食を通して、野草、そして自然に目を向ける機会をつくる。

- ・採取に出る前に、講師の先生から野草の知識を講義していただいたことで、あいにくの雨でしたが興味をふくらませて出発することができた。
- ・植物それぞれの葉の形や特徴に気をつけて見ていた。
- ・6月の上旬という時期、植物がどんどん成長しているところで、新芽などやわらかな葉や芽を発見することができた。
- ・「これが食べられる」「おいしい」と分かると、積極的に採取し、渡した袋が一杯になった。
- ・ボランティアとして参加してくれた中高生も、ありふれた野草が食べられると知り、興味津々でお手伝いしてくれた。
- ・集めた野草を自分達できれいに洗って、主に天ぷらや油いためにして食べた。クローバーの花の天ぷらなど、普段は食べることのない食材が、ことのほかおいしいということが分かり、驚きと感動がいっぱいだった。
- ・大概の野草は食べられるということも体験でき、みんな完食した。

活用した自然資源

桑・イタドリ・セリ・クローバー
よもぎ・ハルジオン・桜の若葉等



- ・ごくありふれた雑草が、食を通して身近に感じることができた。
- ・大きくて目立つ野草には、子どもたちもすぐ気づき、たくさん採取することができたが、比較的小さなものは見逃す傾向があった。
- ・雨の中の活動となったため、じっくり観察したり、比べたりはできなかった。
- ・調理してしまうと、どれがどの植物だったか分かりにくくなってしまった。採取から皿への盛り付けまで、植物の名前が分かるようにしておくことが必要だった。

【令和元年 10月3日（木） なかよしクラブ 秋の遠足（松ヶ岡開墾場 松岡窯陶芸教室「陶の蔵」）】

＜活動内容＞

- ・世界に一つのお皿を作ろう！（粘土に葉の葉脈をかたどるなど）
- ・自然散策、ふれあい（みつけカードを使って、秋のお花探し）。

活動のねらい

- ・自然物を使い、親子で陶芸活動を楽しむ。
- ・自然に親しむ機会を作り、自然と触れ合う楽しさを知る。
- ・子どもたちの好奇心を育む。

- ・周辺にあるもみじの葉っぱを見て「これはお手てみたい！」と言いながらお皿の模様を選ぶ子ども。それを微笑ましく見守る母の姿があった。
- ・席に戻り、葉脈がうまく出るようにするためにどうしたらよいか考えながら「もっとここを押して…」「なでなでしようか？」など会話も弾んでいた。
- ・焼き上がった作品を見て、「こんな風になったんだ！」と世界に一つの作品の完成を喜んでいた。
- ・制作をしていると雨が降ってきた。友達と窓からその様子を見て、「ポツポツって音がする」と雨音に耳を澄まし目を見合わせていた。
- ・雨が上がり、みつけカードを持って「秋の花探し」では「いい匂いがするよ！」「こんな小さいお花にも名前がついているんだね！」など大人の言葉をキャッチして匂いをかいだり、かがんで花に手を伸ばしたりする子どもたちだった。
- ・見つけたツルを引っ張って綱引きのように楽しんだり、縄跳びのように跳んで面白がったり、自ら遊びを作り出し、楽しむ様子も見せてくれた。



- ・松ヶ岡の自然に触れ、存分に楽しむことができた。
- ・粘土遊びが大好きなみんなにとって、自然物を取り入れ、制作したことは、いつもと違った新鮮な経験になったようだ。
- ・子どもたちがそれぞれ好奇心を持ち活動したことが、友達との関係を築くきっかけになり、保護者が共感することで喜びが増し充実した時間を過ごせたように思う。
- ・ねらい以上に素晴らしい経験ができたように感じた。
- ・つぶやきから感性が伝わってきて「子どもってすごい！」と改めて感じる機会となった。

子ども家庭支援センター 転入者親子

【令和元年 10月8日（火） 自然の中であそぼう（由良海岸周辺）】

＜活動内容＞

- ・由良海岸で浜遊びを楽しむ。（砂遊び、生き物探し、貝殻やシーグラス拾い）
- ・周辺散策。（白山島へ続く橋を渡ったり、島からの景色を楽しむ。）
- ・鶴岡の郷土料理を味わう。昼食で鶴岡の秋の味覚（芋煮汁、ぶどう、りんご）を味わう。

活動のねらい

- ・年4回実施している「転入者のための子育て案内講座」の1つとして実施する。
- ・転入して間もない親子に遊べる場所を紹介し、屋外での遊びを体験してもらうことにより、鶴岡の自然の良さを実感し、自然の中で遊ぶことに興味を持ってもらう。



- ・小雨が降ったりやんだりの天気の中ではあったが、長く続く海岸を走ったり、岩場にいる貝やカニ、やどかりに興味を持ち、網を持ってすくおうとしたり、保護者が捕まえた生き物を見たりこわごわ触れたりしては歓声をあげていた。
- ・網を持って保護者やスタッフと一緒に貝ややどかり捕まえをし「もっと」と言ってじっくり楽しむ姿があった。
- ・少し肌寒かったため、屋外での活動時間を短縮したが、その中で子ども1人ひとりの興味や関心に合わせて保護者も関わっていた。
- ・捕まえたものをおみやげにする親子と、見たり触れたりした後、海に返しておしまいにする親子がいた。
- ・屋内での活動にも貝殻やシーグラスを準備したことで何度もすくって楽しむ姿が見られた。
- ・昼食は屋内でゆっくり味わいながら食べることができた。
- ・果物は好評だった。



- ・今年度は転入者を対象にしたが、参加人数がなかなか増えなかった。サークルやなかよし広場の来館者に個別に声掛けした。周知方法の課題なのか、対象が限られているためなのか検討が必要。
- ・対象の年齢（月齢）が低いため、当日の天気によって屋外での活動が難しい場合もあると感じた。屋内で自然物に触れる活動をもっと検討していかなければならない。
- ・参加した保護者からは、「なかなかできない体験ができた」「また参加したい」等好評だった。鶴岡の自然豊かなところがいいという声もあり、実施して良かった。

つるおか森の保育研究会発足 10 周年記念事業

(1) 講演会：つるおか森の保育研究会発足 10 周年記念講演会・鶴岡市子育て推進講演会

○日 時 4月23日(火) 18時～20時30分

○来場者 298人

○会 場 出羽庄内国際村 ホール

○内 容 講演「汐見稔幸さんに訊く、これから必要とされる保育・教育とは」

○講 師 汐見 稔幸 氏 (日本保育学会会長/東京大学名誉教授)

○聞き手 小西 貴士 氏 (インタープリター/大妻女子大学講師)

これまでの子どもたちと現在の子どもたちを取り巻く環境の比較から、これからの教育・保育において重要となることを多彩な資料や写真などを用いてお話しいただいた。

「人間の力の土台を保育園で育てること」「豊かな自然の中で私たちが持続可能な社会を作ること」「自然と相談しながら教育や保育をすること」などを大変わかりやすく、保育・教育の現場、家庭での実践につながる学びの多いフォーラムとなった。



(2) 保育と自然資源を考え直す体験研修会

学びの機会①

○日 時 ①5月18日(土)・19日(日) ②10月18日(金)・19日(土)

○参加者 ①18名 ②24名

○会 場 山梨県ハケ岳南麓・ぐうたら村

○内 容 ①自然に対するまなざしをストレッチする散策

「暮らしに対するまなざしをストレッチする時間」

②ぐうたら村ツアー&ワーク

「こんにちは！森の保育園@清里聖ヨハネ保育園」

○講 師 小西 貴士 氏 (インタープリター/大妻女子大学講師)

講師の小西貴士氏が主宰する山梨県ハケ岳南麓にある「ぐうたら村」を春・秋の2回訪問した。1泊2日の日程のフィールドワークを通して、保育と自然資源について改めて考え、学んだ。



学びの機会②

- 日 時 ①12月19日(木) ② 12月20日(金)
- 参加者 ①23名 ②19名
- 会 場 ①天金 ②鶴岡市役所別棟会議室
- 内 容 ぐうたら村における取り組み
各園での実践状況について
森の保育研究会の今後の取り組みについて
鶴岡における保育者の学びの場について
- 講 師 小西 貴士 氏 (インタープリター/大妻女子大学講師)

参加園の実践例を紹介し、その中から見えてきたことや課題を出し合った。小西貴士氏からは保育者の学びの場の必要性、保護者との関わり方や自然とテクノロジーに対する子どもたちの解釈や理解についてお話し頂き、事例を洗練していくヒントを得ることができた。

学びの機会③

派遣：鶴岡市・南シュヴァルツヴァルト自然公園協会友好協定 20周年記念事業市民訪問団

- 日 時 10月5日(土)～10月12日(土) ※台風19号の影響で帰国延期～18日
- 参加者 佐藤 奈美 (三瀬保育園)
- 行 程 ミュンヘン→ザルツブルグ→フライブルク→フランクフルト
- 内 容 南シュヴァルツヴァルト自然公園協会との友好協定調印式への参加
森の幼稚園の訪問

鶴岡市が実施した市民訪問団に研究会から1名を派遣した。視察研修及び交流事業を通じて、森の幼稚園の先進国であるドイツの教育・保育を体験することができた。



つるおか森の保育フォーラム

先進的な取り組みをしている森の保育実践者の講演やパネルディスカッション、当研究会の活動報告などを行い、保育者・保護者はもとより、広く市民を対象に学習の場・情報交換の場として、開催しています。今年度は討論発表と派遣事業の報告、セレモニー（ミニスピーチ・顕彰授与）の3部構成で開催しました。

○日 時 2月16日（日）13時～16時

○来場者 206人

○会 場 出羽庄内国際村 ホール

○内 容 第1部 発表討論「つるおかの自然を活かした保育で何が育っているのか」

コメンテーター 大豆生田 啓友 氏（玉川大学教授／日本保育学会副会長）

進行 小西 貴士 氏（インタープリター／大妻女子大学講師）

事例提供 田中 梓（朝日保育園）、菅原 梢（松原保育園）

第2部 報告「ドイツ・黒い森のようちえんを訪ねて」

報告者 佐藤 奈美（三瀬保育園） 聞き手 平 智（アドバイザー）

第3部 セレモニー

ミニスピーチ「10年を振り返って」

発表者 神田 リエ（前会長）、渡部 祐子（前副会長）、本間 日出子（会長）

顕彰授与

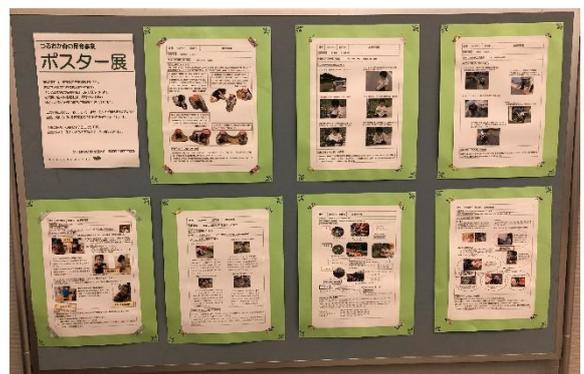
第1部は、発表討論として2園の事例提供を行い、その発表を受けて2～3人のグループで自身の気づきや感想を話し合い、会場全体で共有した。また、発表した2園の先生に向けて大豆生田氏よりコメントをいただいた。

第2部では、鶴岡市・シュヴァツヴルト自然公園協会友好協定20周年記念事業において市民訪問団として、森の保育研究会から参加した佐藤奈美氏に報告を頂いた。

第3部では、セレモニーとして10年の活動を振り返るミニスピーチと、長年に渡って活動を続けてきた会員を顕彰した。また、発足時から昨年度まで会長を務めていただいた神田リエ氏に感謝状の授与を行った。

これまでの活動を振り返り、自然と子どもを結びつける保育者の役割やあり方を再認識できた。

さらに実践を洗練し、積み重ねて、鶴岡らしい森の保育を続けていく大切さを確認したフォーラムであった。





研修会

森の幼稚園勉強会

- 開催期日 ①7月9日(火) ②9月10日(火) ③11月12日(火) ④1月9日(木)
 - 開催場所 ①③④鶴岡市役所別棟会議室 ②金峰少年自然の家
 - 参加者 ①13名 ②10名 ③7名 ④7名
 - 内容 指定図書を読み合わせを行い、基礎的知識や方法論を学び、共有と意見交換を行った。
(全4回)
- ※指定図書『森の幼稚園 ドイツに学ぶ森と自然が育む教育と実務指南書』
(イングリット・ミクニッツ著、公益社団法人国土緑化推進機構監訳、2018、風鳴舎)

自然の中で子ども達を育てていくことの素晴らしさや、子どもの育ちに自然遊びがもたらすことを保育者同士で共有し、話し合うことが出来た。
また、保育者というスキルを存分に発揮するための知識と実践を併せ持つことの大切さを再確認し、自園だけではなく、鶴岡、日本の保育の底上げにつながる要となる責任も感じた勉強会となった。



つるおか森の保育研究会の概要

幼児期における森の保育の意義

東北一の面積を誇る鶴岡市は、市域面積 132ha のうち約 7 割が森林であり、その豊富な森林資源を活用して行政施策を展開する「森林文化都市構想」を掲げています。

人と自然との直接の対話こそが森林文化の原点であるという考えのもと、当研究会は平成 22 年 4 月に発足し、次代を担う子どもたちの豊かな感性や健康な心身を養うために、森林や自然環境を活用した具体的方策についての情報収集や活動支援、研究を行っています。未就学児童の自然環境に親しむ中での「気づき」や「感じる心」を育み、共感の心や見る力を養うことを大切にして各種事業に取り組むことで、豊かな保育・子育てを支え、保育の質を高める一つの道しるべとなることを期待しています。

組織・運営体制

つるおか森の保育研究会は、保育園、児童館、子育て支援関係者等で構成しています。

■研究会の構成（令和元年度末現在、26団体・個人）

○会 員

本間 日出子	会 長	三瀬保育園 園長
伊藤 直樹	副会長	田川保育園 園長
小田 仁	副会長	小堅保育園 園長
齋藤 由美子	かたばみ保育園	園長
高橋 奈津	東部保育園	園長
阿達 美枝	西部保育園	園長
高取 千昭	南部保育園	園長
齋藤 功	松原保育園	園長
羽生 充	ちとせ保育園	園長
高橋 亨	大山保育園	園長
白幡 昭平	大泉保育園	園長
佐藤 崇昌	民田保育園	園長
秋野 涼子	上郷保育園	園長
今野 睦子	黄金保育園	園長
佐藤 美穂	大東保育園	園長
丸山 弘美	いずみ保育園	園長
後藤 誠	朝日保育園	園長
五十嵐 美智	福栄保育園	園長
齋藤 聡	中央児童館	館長
伊藤 和美	NPO 法人明日のたね	代表理事
太刀川 悦子	NPO 法人みらい子育てネット山形	理事長
石田 幸	元中央児童館長・元公立保育園長	
長谷川 真弓	元中央児童館長・元公立保育園長	
伊藤 慶也	環境課長	
本間 明	農山漁村振興課長	
熊坂 めぐみ	子ども家庭支援センター所長	

○アドバイザー

平 智	山形大学農学部食料生命環境学科教授
神田 リエ	元山形大学農学部生命環境学科助教

交流保育

市街地にある保育園の子どもたちが、自然に恵まれた環境にある保育園を訪問し、自然体験活動をとおした交流保育を行います。

小学生や親子対象の体験活動

子ども家庭支援センター、中央児童館が実施している事業で、森や海で、ダイナミックに自然の雄大さを体験します。

ワークショップ

親子で森の保育を体験できるワークショップを開催しています。各施設において森の保育に携わっている会員等の勉強の場でもあり、横の連携が図られます。

自主保育

日常的な保育に自然体験活動を積極的に取り入れます。活動フィールドは、園周辺身の身近な自然から、大きな自然まで様々です。

食 育

地域で採れるきのこや山菜、魚など自然のめぐみを活かした食育の推進に取り組んでいます。

フォーラム

先進的な取り組みをしている森の保育実践者の講演や当研究会の活動報告等を行い、保育者・保護者はもとより、広く市民を対象に学習の場。情報交換の場を提供します。

令和元年度 つるおか森の保育活動記録

おもしろっけの〜▶

森

令和3年1月発行

つるおか森の保育研究会

事務局：鶴岡市健康福祉部子育て推進課

山形県鶴岡市馬場町9番25号

TEL 0235-25-2111

FAX 0235-25-2167

E-Mail kosodate02@city.tsuruoka.yamagata.jp

